

「国際フィールドスクール・イン・礼文島 参加報告」 その2

北海道大学・アルバータ大学(カナダ)主催の国際共同調査

日時：平成26年8月18日(月)～20日(水) 場所：北海道礼文島 浜中2遺跡

調査参加の貴重な体験や成果を、一人ひとりがレポートにまとめました！

礼文島調査の特色

■ 毎年8月、礼文島で何が行われているのか

私たちが参加した調査は、正式には北方圏における人類生態史総合研究拠点という学術プロジェクトの一環として行われました。北大を中心に、カナダ・英国・米国・ドイツ・ロシア各国の研究機関が連携し、「北半球の狩猟採集民社会がいかに地球環境に適応し、文化的多様性を生み出したか」を明らかにする壮大なプロジェクトです。

■ 若者が集うフィールドワーク

このプロジェクトのもうひとつの目的は、次世代を担う若手研究者の育成です。すなわち、各国から集まった若者が同じフィールドで切磋琢磨し成長する場の提供です。研究者や学生が英語を公用語に共同調査を進め、議論を通じて研究を深めていく様を、私たち関高生は目の当たりにし、そのような方々と同じフィールドに立てることに喜びと興奮を感じる一方、重い責任も感じました。



■ 先住民の文化に学ぶ自然との共生

上掲のデザインはアイヌ出身のアーティスト、結城幸司さんがデザインした今回のプロジェクトのロゴマークです。人間とクマの顔が図案化されています。クマはアイヌにとって神聖な動物です。アイヌは自然界のあらゆるものに神が宿るという信仰をもっていました。動植物は神が人間に与えてくれたものだから、再び神の世界に返すべきである、そう考えたアイヌは、クマを殺しその魂を神に返す「魂送りの儀式」(イヨマンテ)を行ってきたのです。縄文人やオホーツク人等、太古の狩猟採集民も、アイヌ同様の世界観をもっていたことが遺跡の状況からうかがえます。礼文島のフィールドは、先住民の智慧に学ぶ場でもあります。

参加した関高生(1年生8名)のレポートの一部を紹介します

<英語を通じたコミュニケーションについて>

■ 発掘現場では、カナダ・イギリス・アメリカなど様々な大学が共同で調査しているので、公用語は英語です。**現場に着いたとき周りで英語が飛び交っていてとても緊張しました。**調査では多くの外国人と交流ができたと思います。私が袋に土を入れていると、カナダの女性が手伝ってくれました。「どうやってやるの?」「これは土器?普通の石?」などと片言な英語で話す私に対して、その人が理解しようと一生懸命に聞いてくれる姿が嬉しかったです。国の違いや年齢など関係なく、皆が一つの目標にむかって活動出来た感じがしました。(1年 粥川楓日)



■ はじめは緊張してなかなか海外の方に話しかけることができませんでしたが、**勇気を出して話しかけ、気持ちが伝わったときは嬉しかったです**。私は2日目の朝に携帯を水没させてしまい、お昼の英語の自己紹介でそのことを話しました。すると、その日の午後に1人のカナダ人女性が「ポリ袋にお米と携帯を入れるといいですよ。」と教えてくれました。まず自分の話したことが伝わっていたことに安心しました。そして解決策を教えてくれたことにも心が弾みました。教えてくれたことのすべてが聞き取れたわけではありませんが、彼女と会話ができました。翌日、帰り際に話すことができたので感謝の気持ちを伝えると、彼女は私を抱きしめてくれました。**本場で使える英語をもっと身につけたいと切実に思いました。**(1年 那須さくら)

<研究者の姿に学んだこと>

■ 今回の調査では、多くの研究者の方に出会いました。忘れられない二人の先生からの言葉があります。一つ目は、「貝塚はごみ捨て場ではない。狩猟採集民族にとって魂送りの場所である。」という言葉です(北大・加藤先生)。貝塚というと食べたあとの貝を捨てるごみ捨て場のイメージがあるけれど、オホーツク人にとっては魂を送る場だということです。初めて発掘現場に行ったときにこの話を聞き、**今の人間の常識を捨てて発掘しないといけないと思いました**。二つ目は、「考古学は、宝探しではない。」という言葉です(北大・長沼先生)。どうしても、発掘をしていると遺物が出てくると嬉しくなって、遺物を掘り出そうという気持ちになってしまいました。しかし、考古学で大切なのは、遺物もだけれども、遺物の出土状態等、周囲との関係性を考えることだから、宝探しとは違うことが分かりました。多くの先生に話を聞き、質問もできる機会があり、私達の質問にも丁寧に答えてくださって嬉しかったです。先生方は、それぞれ専門があって、専門外のことだと教授の先生が、院生の方に聞いていることにとっても驚きました。私は、**今回の調査で初めて研究者と呼ばれる方々に会いました。今まで会ったことのある大人とは違う目の輝きを持っているように感じました。**(1年 土屋もえり)



■ 発掘調査では竹のヘラで土を削ったり、ミニほうきや竹串で細かいところを少しずつ掘っていきます。そして、海獣の骨や土器、石器などを掘り出していきます。これらの作業はとても長い時間をかけながら少しずつ進めていきます。この調査も5年計画です。こんなに長い期間、少しずつ地道な作業をするには相当な精神力が必要だと思いました。しかし、発掘調査の現場では弱音はいつさえ聞こえてこず、逆に喜びの声がたくさん聞こえてきました。これは、地道な作業が積み重なって実っているからこそその声だと思います。(1年 肥田龍太郎)

■ この調査の代表である加藤博文先生が、自分で土をかぶりながら発掘している姿からは、**立場など関係なく学ぼうとすることが大事なのだ**ということを学びました。そしてこの調査に参加している方々はみなさん発掘が楽しくて仕方がないように思えました。**海外の人との交流として英語で自己紹介と関市の紹介をするときは緊張したし、ちゃんと伝わるかどうか心配でした。しかし、やってみると笑ってくれたり、反応を示してくれたりして挑戦してみた甲斐があったと思いました。**恥ずかしながら自分の意見を言うことは礼文島のみならず、高校生活や日常生活でも続けていきたいと思いました。**日本人と海外の人が一緒になって調査する姿を見て、学問にはどこで生まれたとか、言語とかは関係ないのだと感動しました。**(1年 村山康大)

<調査を通じて学んだこと>

■ 僕は豚の歯を発掘しました。礼文島には豚がいないと思っていたので、豚の歯が出てきたことは意外でした。さらに、オホーツク人が犬を食べていたということには驚きました。そして、北大の増田先生から、礼文島のヒグマと、サハリン、シベリアのヒグマのDNAを比較することでそのヒグマがどのような経路で移動してきたのかがわかるという話を聞いて、とても興味を持ちました。発掘では一か所だけを掘るのではなく、全体を均等に掘ることが大切だと知りました。なぜなら、均等に掘ることによって同じ時代の遺物との関連性を知ることができるからです。発掘された骨の中には骨細胞というものがあって、その骨細胞は一部腐っていますが、ある程度DNAが残っています。その**DNAを精製し、増幅させることで、解析することができると分かりました**。また、礼文島からは新潟のヒスイ、サハリンのアスファルト、九州の貝殻も見つかっていて、昔の人がこんなに遠くに住んでいる人と交流をしていたことを知って驚きました。(1年 木村岳瑠)



<自分の将来について考えたこと>

■ 僕は今まで一度も外国へ行ったことがなくて、外国の人と関わることは皆無に近かったです。だからこそ、今回のこのような調査に参加して自ら外国の人と関わってほしいと思い志願しました。礼文島において実際、外国の人と関わってみて、日本人と大きな違いがあるとすれば、それはフレンドリーなところだと思います。日本人の場合、委縮してしまうのかは分からないけど、結構控えめな感じが目立ちます。しかし、外国の人は常にエネルギーで、何かは分からないけど、常に自信を持っているオーラがみえました。

日本人というのは、学力は世界でもトップクラスだと思います。でも、積極的に自分の意見を言えなかったり、答えのある問題は解けても答えのない問題に対しては弱い部分があったりして、優秀だけどそれを活かしていないと思います。この能力をいかせる力こそがグローバルな現代においてもっとも必要とされる力であると思うので、**答えがない問題をどう回答していくのか、ということに重点をおきながら、今後の生活を送っていきたいと思います**。(丸山義仁)

■ 将来の仕事では、英語を使って外国の方々と関わる仕事をしてみたいです。おそらく、僕たちが就職するときには、今よりもっとグローバル化が進んでいると思います。今の社会では、グローバル化は物質的な利益を重視して取り入れられていると思います。だから、僕は、**そうした利益だけでなく、外国の方々の考えや自分の意見を混ぜて、あらゆる方向からみた視点で、人々、動物、環境など多くの事がよくなるような仕事に就きたいです**。僕は特に今回の調査に希望した理由でもある、環境をよりよくできるような研究をしてみたいです。**現在の世界で起きている環境問題は人類全員に責任があるように僕は思います。便利な生活を目指す代償に環境を傷つけてきました。その環境を元に戻し、よりよくしていくのは、次世代のリーダーでもある僕たちの世代だと思います**。だから、世界の人々の意見や技術を取り入れたり自分でも意見を持ち環境について研究したりして、世界の人々と協力しよりよい環境づくりができるように、これから学習を今よりがんばっていきたいです。(1年 高木健)

